

## 97年度「北河内地域における生活環境と環境デザイン原理 に関する研究」中間報告総括

Research on Man-environment and its Environmental  
Design Principle in Kitakawachi Region

主任研究員：奥 哲治

分担研究員：山村 悟 植松曄子 星野 暁 中川 等 浜田ひとみ

長期的共同研究としての本研究の主題は、人間の生活と相即した物や場所の意味連関の総体の場としての「生活・環境」である。研究は表題に示す通り次の二つの視点からなされている。一方は、この意味連関の総体を、自然的歴史的社会的な、いわゆる固有の文化的意味の場である「地域」ととらえ、そこで具体的な「物」や「場所」が「人間」とのかかわりでもつ意味を丁寧にとまほぐしてゆくという視点からの「生活・環境」の研究である。また他方は、そのような地域に根ざした「生活・環境」の場を開くところの人、物、場所の動的なかかわりのあり方そのものを明らかにしてゆくという視点からの研究である。前者は「北河内」という「地域」の時間的空間的広がりの中で、「ひらかた大菊人形」（山村）「河内木綿（織物）」（植松）「伝統的な町家と町並み（枚方宿）」（中川）「路傍祠」（浜田）の研究として継続された。また、後者は「パブリックアート」（環境オブジェ）」（星野）「教育環境」（奥）の研究として継続された。二つの視点はそれぞれを補い合いながら、本共同研究を継続する発展的な力になっている。本年度の個々の研究は以下のようにとらえることができる。

「ひらかた大菊人形」の報告は、人間の宗教的ありかたに発する自然素材の造形が、江戸から明治という大きな時間の流れ、つまり非日常の宗教的なものが大衆文化としての日常の園芸文化やレジャーと結びついてゆく近代化という流れのなかで、「ひらかた大菊人形」の誕生についての報告である。しかも、「菊人形」という具体的な「物」のあり方が、日本における都市市民の生活観、自然観の近代化における変遷と深いかかわりをもったものとしてとらえうるといふことの指摘は、「地域」研究が現代の日本文化のありかたそのものに結びついた射程の大きな研究になるということの貴重な指摘である。「河内木綿」と「伝統的な町家と町並み」の報告は、詳細な調査によって自然的、歴史的、社会的な生活・環境の場の焦点になる「物」の生成、形成のあり方の報告である。生活・環境の場において身近に接している「物」の意味の連関が、「物」のあり方の方から丁寧にとまほぐされてゆくとき如何に厚みのある豊かさをもっているかということの具体的な報告である。「路傍祠」の報告は、北河内という空間的時間的広がりをもった「地域」における信仰対象としての「物」の調査研究を、国際的な広がりにおいて比較することの端緒をひらく方向をもった報告である。地域の固有性を、その場所における固有の自然、歴史、社会的事象に即して明らかにしつつ、さらに外からの国際比較において明らかにしていくというこ

の報告は、本研究にさらに厚みをあたえてくれるものである。「パブリックアート」の報告は、地域文化の意味の焦点になることをめざして創造された「物」が、「素材」としてその自然環境、設置環境においてどのような時間的変遷を経ていくのか、またその時々記憶をいかにしてそれ自身に刻んでゆくのかということの報告である。「物」が、「地域」という文化的意味連関の焦点になってゆくプロセスの、芸術家自身の視点からの貴重な報告である。「教育環境」の報告は、「物」のあり方がもつ教育可能性についての基礎的な研究をもとにして、地域環境の教育的な可能性にかかわる建築的な物の構成のあり方をさぐる方向をめざした報告といえる。

## 分担研究報告

### 学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究

奥 哲治（工学部）

地域環境のもつ教育的な可能性について建築的に関心し、主に環境の建築的な構成（物的空間的場所的な構成）と、広義の教育的なことがらとの関係を問うてきた。その際、幼児教育の創始者であるF. フレーベル（1782～1852）の教育思想をとりあげ、昨年度は「場所の構成」という点から「Kindergarten（幼稚園）」のありかたを、また本年度は「物の構成」という点から「Gabe（恩物）」のありかたを、彼独自の包括的な世界観とのかかわりから検討した。フレーベルにあっては、万物は「生命」のはたらきを離れて独立にそれ自体として存在する実体的なものではなく、「神的生命」のはたらいている場とひとつになって個々の生命のはたらきとして表現されるものである。場の生き生きしたはたらきが万物の生命の表現を促し、また逆にその万物の生き生きした表現が場のはたらきを促す、そのような万物と生命のはたらきとがお互いに限定し合う関係から世界のありかたをとらえている点が、彼の世界観の特徴である。したがって、個々の生命は、それぞれの本質を、統一性（神的生命との相互限定）、個別性（個々の生命の内外連関の固有の表現）、多様性（あらゆる他の個々の生命との相互限定）の展開として、これら三重の関係を相互に関係づけている三位一体的な表現活動、言い換えれば「部分的全体Gliedganze」というありかたをして生きている。自覚的で創造的な存在である人間に＜いかにして＞この「部分的全体」という本来のありかたを、つまり神的生命の根元的はたらきの場への参与の生き生きしたありかたを可能にするか、ということがフレーベルにとっての教育の使命であり、この＜いかにして＞という方法や手段への回答として考案されたものが「恩物」である。「第一恩物」のあり方から読みとれる「恩物」の特徴は、①自然は「部分的全体」のあり方を十全に示しているが、人間にとってその全体的なあり方ははるかに遠いものである。したがって、②自然と人間を媒介する第三のものが必要になる。③これは、媒介するものである限り、自然とも、人間ともその本質において関係をもっていなければならないが、しかし自然でも人間でもあってはならない（「相対する類似のもの」「対立的同一物」）。言い換えれば、④どちらの性質ももっていてどちらにも姿をあらわすが、どちらの姿にも

還元できないそれ自身独立したひとつの全体である。つまり、④上述の三重のはたらきの関係と関係を相互に関係づける活動のはたらきが現れてくるようにはたらくもの、重層した時間的空間的な生命の活動の展開におけるダイナミックな相互限定的な関係を関係づけるはたらきを促すものとして、十全な「部分的全体」のあり方へ人間を誘うものが「恩物」である。このような「第一恩物」のあり方は、環境の教育的な可能性にかかわる建築的な物の構成のあり方への基底的な示唆を含んでいると考えられる。他の「恩物」のあり方をさらに検討することが課題として残された。

## 北河内地域各市における公共空間の視覚的 アメニティーに関する批判的研究 山村 悟（工学部）

当初の分担課題の調査、研究にひとまず区切りをつけ、平成6年度から、「植物素材による民衆造形としての菊人形」を新しいテーマに取り上げ、江戸時代中期以降の花卉園芸、文化の振興（武家・貴族のものから庶民の楽しみへ）と菊人形のかかわり、あるいは農民芸術としての吉浜細工人形（愛知県高浜市）との接点など、近世日本の園芸文化史と庶民レジャーの変遷に視点を向けながら、総合的かつ多角的な「菊人形」研究を続けている。

テーマの端緒である「ひらかた大菊人形」は、1910（明治43）年開通の京阪電気鉄道が沿線開発と旅客増の一手法として、興行師や造園業者、人形師らに依頼して同年秋、枚方市香里丘陵で始めた。その後、京都府宇治や大阪府千里山への短期移転、あるいは戦争による中断などの曲折を経て、1949（昭和24）年から現在地で秋の「ひらかたパーク」メイン・イベントとして定着した。

近代日本の初期型マス・レジャーの主役に取り上げられ、戦後のカラー・テレビ普及以後は大河ドラマなどのマス・メディア・イメージと結びついた、この菊人形という客寄せ催事は菊花という植物素材による、きわめて日本的な造形であるが、その原型の「つくり菊（菊細工）」は17世紀後半、江戸・染井、巢鴨などの植木屋を中心に盛んになった花卉園芸ブームの中で広まり、19世紀初めの文化・文政期には趣向を凝らした「菊人形」が秋の「江戸中の貴賤」の楽しみになっていた。明治に入ってから、東京の駒込・団子坂の菊人形のにぎわいが夏目漱石『三四郎』、二葉亭四迷『浮雲』、森 鷗外『青年』などで描写されているが、明治42年新築の両国国技館で秋の名物になった菊人形が、大阪・難波や堺、そして枚方などの菊人形興行のモデルだった。

一方、「吉浜の細工人形」は、江戸期の17世紀半ばに始まる仏教催事と豊作祈願の農民芸能が結びついた、地元の二つの寺院と名古屋市熱田神宮の奉納行事（いずれも現在は5月8日）にかかわるもので、この行事と地元の人形づくりの技能は衰退寸前でようやく1964年、愛知県無形文化財に指定された。奉納され、一部が保存されている細工人形は、木の根、稲わら、棕櫚、松かさ、竹皮、貝殻などあらゆる日常、身の素材を自由に使用している。細工人形自体は菊を使用した歴史を持たないが、その伝統技能が買われて、吉

浜の人たちは明治35年、名古屋・大須の菊人形に招かれたのを皮切りに、今でも秋になると現代版細工人形師として、各地の「菊人形」に出かけて行く。私は、いかにも海辺の農民らしいナイーブ・アートとしての吉浜の細工人形の造形手法は、伊勢湾 — 太平洋系のもと考え、国立民族学博物館や鳥羽市「海の博物館」の収集資料に類似のものを探したが、ルーツと見なせる例に行き当たっていない。いずれにしても、信仰心に発する天然素材による素朴な民衆造形が、爛熟期江戸の大衆園芸文化、あるいは文明開化以後の都市近郊型大衆レジャーと結びついたきわめて珍しい例であり、近世・近代の江戸・東京、名古屋、大阪に見る都市市民の自然観とも深くかかわっている。これらをつなぐ文献資料をほぼ収集し終えたので、丹念に考察したうえで論文にまとめたい。

## 北河内地域の生活者の環境と自然について

植松 暉子（工学部）

北河内地方の代表的なクラフト・河内木綿と河内木綿との関連事項について、平成4年から調査分析を行い、河内木綿の導入と発展過程・綿作地帯と機物神社のかかわり・韓国織物・織機との関連性について中間報告で述べた。

平成9年度は、河内木綿の銘柄・文様・色調について考察した。宝永元年（1704）江戸幕府が長年の懸案であった大和川付替えの大工事が完成した結果旧川床は新田化し、綿を栽培したことからである。元来その生産形態は農家の自給自足であったが、開発された新田が綿の栽培に最適地であったため面積も著しく増加し収穫量も多量となったため、順次商品経済形態に大きく転換し、着尺地（衣類用の反物）や蒲団地などのほか、暖簾、旗、半天、酒袋等織られる様になり様々な銘柄が考案されるようになった。

宝永（1751）～明和（1784）期の河内各村（八尾市）で織られていた銘柄は、

紺無地	— 法善寺	緋（雨緋・チリ緋）	— 沼村河内
納戸無地	— 恩智	河内紺緋	— 上之島
高安白木綿	— 高安村	蒲団夜具縞	— 東弓削
縞	— 三宅		

明治17年の銘柄—八尾市西岡綿問屋蔵の「木綿改有物帳」「地入帳」によると、当時の銘柄は、「生白、嶋無地、本晒、嶋旧尺物、花色浅黄、生白晒、生白染、染下晒、嶋飛白無地、夜具縞、蒲団縞、巾広、晒雲斎、色物三十五度丸紡、巾木綿、丸紡広巾、晒染、染チラシ地、染木綿上り物、染晒屋行、縞無地染組、縞崩黄染色紺、生白赤広巾、丸紡晒、輸出木綿、蔵有物、地入物、高安丸紡、紺納戸、無地緋」等があげられている。

色調は、河内木綿は紺系が多くみられ、藍系（濃藍系・薄藍系）茶系、緑系で、紺色、茄子紺、納戸色、瑠璃色、ベンガラ、焦茶、鳶色、茶褐色、黄色、ベニガラ色、緑色、蒲色、丁字茶、柴などが見られる。

先染め（糸を染めてから織る）による柄を河内木綿の縞帳（縞手本と云われ織りあげた布の一部を貼りつけ良い縞を織るための参考にしたもの）によると、千筋縞、万筋縞、二筋縞、大名縞、子持大名縞、棒縞、両子持縞、ヤトラ縞、両滝縞、金通縞、よろけ縞等が

見られる。縞帳に大きな影響を与えたのは、江戸中期ころに盛んに舶載された南方系の縞物であったと云われており、唐棧縞、カピタン縞、ジャガタラ縞、セイラス縞、チャンボ縞等である。格子縞は、ミソコシ格子縞、ミジンコ格子縞、弁慶格子縞、子持格子縞、割込格子縞、四筋サイノメ格子縞、ゴバン格子縞、小格子縞、二筋格子縞、二子持格子縞等がある。後染め（織りあがった布に色・柄を染める）については、次年度に報告します。

## 泉佐野市総合文化センターの環境オブジェ制作設置 及び完成後の調査研究

星野 暁（工学部）

平成8年5月泉佐野市の都市総合整備計画の一環として開館した泉佐野市総合文化センターの中庭一面に設置されたパブリックアート（環境オブジェ）作品「表層・深層」の、その後の調査研究を報告したい。

屋外の設置としかも浅いプール状の水面から浮び上るかたちで設置するという陶の素材の作品にとって二重に危険を伴う仕事であったが、強度実験や水中での変質や苔の発生に対する実験調査を積み重ねて、本作品の制作を進め一年後完成した。現在2年という時間を経て作品にどのような変化が起きているか、またそれはいかなる原因によるものか、少し書いておく。

まず当作品は、例えるならばわが国伝統の黒瓦とほぼ同質の素材である。日本の建築空間に屋根瓦やたたき、軒下等に敷く埴として使われてきたこのやきものは、900℃前後で焼かれた軟陶であり — ちなみに通常の陶器は1200～1250℃、磁器は1300℃前後で焼成されている — 強度の点で少し弱く問題はあるが、日本建築のなかで、この煙でいぶした黒染めの質感こそ、我々の湿潤な気候風土の中から生れ育ってきた文化としての黒なのである。雨にぬれた黒瓦の美しさに感心しない日本人がいるだろうか。私とアートディレクターが、この黒の美しさを生かす為に、いくつかの欠点を押して、あえて選びとった素材なのである。しかし、予想をはるかに超えてその欠点、弱点からいくつかの問題が生じてしまった。その第1は設計時水の流れがこのプールを横切って流れる方向を持っていたが、完成時の水路はUターンして滝となって地下に落下するかたちをとったため、プールが袋小路となり、水の流れがよどむことになってしまったことから生じる水アカである。黒陶オブジェの側面に上下する水位のラインが白い水アカとなって付着し、洗っても落ちないのである。この水アカは水中に多量にほうり込まれた塩素によるものではないかと考えられるが、追跡調査を必要とする。

現在2年を経過した段階での調査研究はここまでである。もう少し、調査を継続し、他の変化も含め原因の探求をしてゆきたいと思っている。

## 北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究

中川 等（工学部）

本分担研究は、北河内地域における伝統的な住環境と民家の形成と展開の過程を主題として、平成3年度は高塀造りと瓦葺き民家、4年度は『河内名所図会』、5年度は近現代の地形図について論考し、6年度は住環境に関する現地調査を行い、7年度は交通の発達と住宅地の拡大について考察を加え、8年度は民家の建築調査を実施した。

9年度は、北河内地域の伝統的な町家と町並について、比較的保存状況のよい旧枚方宿を事例として取り上げ、『枚方市建造物調査報告書』など既往研究や関連資料を収集・整理して、それらの知見に基づいて町家の表構えと町並景観に関する現地調査を行い、また代表的な船宿・鍵屋の内部を見学して、空間構成や構造技法、造形意匠を分析した。

枚方宿は、豊臣秀吉が淀川左岸に築造した文禄堤を利用して近世初頭に成立したと考えられており、その後、京街道の交通と淀川の水運によって宿場町として発展したが、明治末期に京阪電鉄の開通によってその機能の多くを失った。旧宿場町は約1.5kmの長さを持ち、現在でも伝統的な町家と町並景観を比較的よく伝えている。

町家の表構えは、通り庇を付け、2階は壁・軒裏を漆喰で塗り込め虫籠窓を開き両妻に袖卯建を設ける形式が多く、1階は大戸や出格子などを構え、揚見世を備える例も確認される。平面は、土間に沿って居室を1列に並べる間取り、特に1列型3間取りが多く、ほかに2列型や表屋造り、船宿型も報告されている。構造は、裏手の座敷と竈屋土間を下屋で葺きおろす形式、あるいは座敷を角屋として突出する形式が典型とされる。また、2階の居室化は他の地域と比較して遅く、総じてやや丈の低い町並となっている。

鍵屋は、天正年間（1573～92）の創業と伝え、淀川筋を代表する船宿の一つで、表を京街道に面し、裏を淀川に接する独特の屋敷構えをもつ。

主屋は、18世紀末の建築と推定され、中央に通り庭を設け、上手には表から前土間・店・中の間・奥を並べ、下手には表から竈屋土間と4畳半を配する。ふつうは土間の裏手に位置する竈屋を表側につくる点が船宿型町家の最大の特徴で、営業上、川からの出入りが重視されたための配慮と考えられる。

主屋の背後に建てられた別棟は、昭和初期の和風建築で、2階の63畳敷の大広間（折上格天井）をはじめ各階に大小の客室を配し、1間幅の中廊下や大階段を設けるなど、全体に豪壮なつくりである。地階には、淀川から直接船を入れた船入が残り、その上部を部分的に吹き抜けにするなど、見応えある空間を展開している。

伝統的民家の建築調査は8年度より開始したが、今後、住生活も含めて調査事例を増やして研究精度を高めていく予定である。

## 北河内地域における路傍祠に関する調査研究 浜川ひとみ（工学部）

平成6年度および平成7年度は、各年度におけるのこれまでの調査結果に対する考察を各市ごとに行い、平成8年度は11市を全体的に捉えて考察を行い、各地域の固有性をとらえた。

本年度は、これまで調査対象としてきた国内の路傍祠と同類のもの（日本で調査対象としてきた路傍祠の規定は、神社仏閣のような建築物に比べスケールにおいて小さいが、その数が多い信仰の対象である）で、外国の地図に落とされているものがあるかどうかを検討すべく収集した各国の地図を検討した。さらには、実際に行ったイギリスの現地調査について報告する。

さて、国内においては国土地理院1/2500の地図記載の記号によって表示されている路傍祠を調査したので、各国の同縮尺またはそれに近い縮尺の地図を手に入れた。

韓国などは縮尺が大きくなるほど、軍事上の事情で手に入れるのが不可能となり、地図記号での路傍祠の表示はない。路傍祠に類似の木製の道標にあたるものが、写真等では実際に見られる。路傍祠類がたくさん見られる他のアジアの国ではタイがあげられ、それらも地図に載ってはならず、民族色豊かな色のあでやかなものである。

ヨーロッパになると、ドイツにおいては、魔除けとされており、道の脇、住居に続くゲートなどに、十字架に張り付けられたキリスト像が一部の地域に見られることがわかった。フランスでは、泉の中心部に祠のついた像が立っており、泉のあるところにはほとんど見られる。イタリアにおいては壁そのものに入り込んでいるものもあり、独立しているものもある。たいてい切り妻型の屋根がかかっており、金色などの華やかな彩色のものが多く、生花やろうそくが供えられ、日本のものとの類似が見られる。地図は入手していない。

同縮尺の地図が手に入れることが可能であったイギリス・ロンドン・リッチモンド地区の路傍祠類を訪ね、どのような立地条件で、どのような規模なのかを調査し、日本のそれらと比較する事ができた。

実際に調査したイギリスにおいては、いずれもカソリック教会のヤードの中に位置し、マリア像、もしくは十字架に張り付けられたキリスト像であった。屋根のついた祠の中に納められているもの、屋根だけであるが付属しているものが見られた。

ヨーロッパでは偶像崇拜禁止令が726年に出され、これまでの聖像の類は壊されてしまったため、現存している古いものはなく、どれも新しく作られたものである。

日本でも明治の神仏分離令の影響を被り、<排仏毀釈>が実行され、ヨーロッパと同様の現象はあったが、室町時代などの古い地蔵なども残っている。

国が違っても、同様の調査は行えないが、国内・国外の調査からわかったこととしては、単なる石塊として置かれているようなものから、信仰の対象として生きているという状況を呈するものまでであるというのが共通に言えることであり、信仰につながるまでいかなくとも、それらが取り壊されず、現在もなお残っていることの意義を考えたい。